

2009年7月18日開催

農業環境フォーラム報告書

目次

農業環境フォーラムとは.....	1
10:00～12:30 人と自然とが共生する世界を実現する為の活動報告.....	2
原 耕造(はら こうぞう).....	3
足立 直樹(あだち なおき).....	4
稲葉 光國(いなば みつくに).....	5
石黒 功(いしぐろ いさお).....	6
藤原 誠太(ふじわら せいた).....	7
中村 陽子(なかむら ようこ).....	8
藤崎 健吉(ふじさき けんきち).....	9
郡山 昌也(こおりやま まさや).....	10
13:00～14:00 銀座の屋上農業体験・銀座が農業でおもしろい！.....	11
14:30～16:00 バズセッション.....	12
1グループ第1セッション 境 眞佐夫・中村 和代.....	14
1グループ第2セッション 安井 浩和.....	16
2グループ第1セッション 木内 孝・岡山 慶子.....	17
2グループ第2セッション 廣瀬 光子.....	19
3グループ第1セッション 郡山 昌也・鈴木悌介.....	20
3グループ第2セッション 久松 達央.....	21
4グループ第1セッション 服部 徹・大橋 進吉.....	22
5グループ第1セッション 星野 智子.....	24
5グループ第2セッション 高橋 晶子.....	25
5グループ第3セッション 永井 聡.....	26
6グループ第1セッション 根本 伸一.....	27
6グループ第2セッション 土屋 献一郎・相澤 菜穂子.....	28

7グループ第1セッション 須藤 美智子・伊藤 博隆・牧野 ふみよ	30
8グループ第1セッション 郡 健次	32
8グループ第2セッション 川島 豪紀	33
8グループ第3セッション 野津 喬	34
16:30~18:00 G8 セッション	35

2009年7月18日 農業環境フォーラムとは

農業環境フォーラムは、ファームエイド銀座2009の中で行われたイベントです。生物多様性や環境問題、有機農業だけでなくメディアやレストラン経営、流通、ロハス、オーガニック、養蜂家など各業界の第一人者が一同に会しました。生き抜く、正す、やる、気付く、治す、つなぐ、創る、変える、の8つのテーマに分かれ、どのように日本を立て直したらよいかそれぞれの視点から考え、発表しあいました。その皆さんの話を聞くだけでなく、それぞれのテーマのセッションで生物多様性を守る有機農業や環境保全型農業、おしくて楽しい食の安全を拓げていくにはどうすればいいのか？について、参加者の皆さんにも参加してもらって「一緒に考えてみよう！」というこれまであまりなかった試みでした。当日の内容は非常に素晴らしかったため、来年に繋ぐよう報告書に記録をまとめました。

ファームエイド銀座とは

都市で私たちが毎日何気なく食べているものには、里山や奥山そして海のたくさんの地域が関わり、多くの人の想いが込められています。銀座ミツバチプロジェクトが主催するファーム・エイド銀座は、そんな地域と人を銀座から応援するイベントで、紙パルプ会館の中と外で地域限定の野菜や特産物を売ったりしています。

銀座で、ちょっとだけ、こだわりの食を味わってみませんか。

銀座で、ちょっとだけ、環境や農のことを知って、考えてみませんか？

あなたの「おいしい！」が日本の地域と食を元気にします。

銀座ミツバチプロジェクトとは

銀座ミツバチプロジェクトは銀座の屋上でミツバチを飼っているNPO団体です。ミツバチは農薬を一振りするだけで群が全滅してしまう程弱い生き物です。農薬で山になったミツバチの死骸を前に、私達は環境を意識するようになりました。そこで無農薬で頑張っているファーム（農）をエイド（援助）するイベントを企画しました。それがファームエイド銀座です。

10:00~12:30 人と自然とが共生する世界を実現する為の活動報告

10:00~の活動報告ではお一人につき、15分という極端に短い時間の中で農業界、環境界の第一線での活動がどのようなものか8名に語ってもらいました。

報告者 1【生き抜く】**原 耕造**(生物多様性農業支援センター理事長)

2【正 す】 **足立直樹**(株式会社レスポンスアビリティ)

3【や る】 **稲葉光國**(民間稲作研究所理事長)

4【気付く】 **石黒 功**(本来農業ネットワーク 代表理事)、

5【治 す】 **藤原誠太**(日本在来種みつばちの会会長)

6【つなぐ】 **中村陽子** (メダカのがっこう理事長)

7【創 る】 **藤崎健吉**(藤崎事務所)

8【変える】 **郡山昌也**(国際有機農業運動連盟[IFOAM]世界理事)

司会 **高安和夫氏**(ファーム・エイド銀座2009実行委員長)



1 【生き抜く】 ～命をいただく～ 報告者

原 耕造(はら こうぞう)



メッセージ

人と自然は共生するのではなく、人は自然と一体不可分の関係です。

田んぼ土の中にいるイトミズから母の胎内を感じ、水の中にいるオタマジャクシやゲンゴロウから稲との一体感を感じ、水の上のトンボやツバメから風の便りを感じてみませんか。

特定非営利活動法人生物多様性農業支援センター理事長 田んぼの生きもの調査活動を全国で展開し、韓国での活動も支援している田んぼが食料を生産するだけでなく様々な命を育てていることを普及するための人材養成活動や映画「田んぼ」のプロデュース活動をしている

要約

「いただきます」。命を頂くということを食事の際にきちんと口に出して言うのは実は日本と韓国の2カ国しかありません。もう一度いただきますという意味がどういう背景から生まれてきたのかを考える必要があるのではないのでしょうか？私達は田んぼの生き物調査をやって、いただきますということの意味合いを肌で感じる訳です。食料安全保障ももちろん大切な問題ですが、有機農業の問題は、大元は環境をどのようにするかというところから発生しているのではないのでしょうか。有機農業が自分たちの健康のことでもある上に、田んぼのカエルやトンボなど様々な生き物の命をはぐくんできているというところにまで考えていかないと、本当に有機農業を支援していこうという気持ちにまではならないのではないのでしょうか。一つ問題提起をしたいと思います。実は生き物調査をやると減減の方の田んぼからはヤゴが出てこない。それにも関わらず、稲が無く、水が貼ってあるだけの田んぼからはヤゴがいっぱい出てくる。食の安全性という観点から考えると、減減の方がすごく良いイメージがありますが、減減にするために、いくつかの複数の成分の農薬を使う。今の農薬は稲がいったん吸ってから後から効いてくるというスタイルになっていて、これがヤゴがいなくなった原因ではないのかということが実は言われています。ミツバチの問題も同じ。農業をやっておられる方だけでなく、消費者の側も一緒になって、もう一度、農業って何かということ、私たちの食を考えていかないと、この問題は永遠に解決していきません。1億2千万人が37万平方kmの環境と農業、林業、漁業もどうしていくのかということを考えていく大きなうねりの出発点になってもらいたいなと思っています。

2【正す】 ～私たちと自然の法則～ 報告者・バスセッション助言者

足立 直樹(あだち なおき)



メッセージ

持続可能な社会に欠かせないのが農業であり、生物資源を基盤とした産業です。自然の仕組みに学ぶ産業が再び主流となるように、21世紀の企業が尊重する自然の法則を皆さんと一緒に考えたいと思います。

理学博士。大学院で植物生態学を学んだ後、国立環境研究所で熱帯林の研究等に従事。その後独立し、2006年から株式会社レスポンスアビリティ代表取締役。企業と生物多様性イニシアティブ(JBIB)事務局長等も兼務。持続可能な社会を作ることを目指して、企業による生物多様性の保全活動などを支援している。

要約

自然の法則をタイトルにお話をさせていただきます。アリは非常に小さく、体重は1mg、千分の1グラムです。ところが地球上のアリの体重を全部足しあわせると、全人類の体重と同じぐらいになります。このアリが環境問題を起こすとみなさん聞いたことがあるでしょうか。ゴミ問題、食料問題。たぶん聞いたこと無いはずですが。それはなぜかという、自分たちが出したゴミはきちんと自分たちで安全に処理できるのです。食物に関しても外から取ってくるのもあるのですが、中には自分たちで育てているのもあるのです。そう考えてみると、アリは人と同じ体重なのですが、地球に優しい生活をしているのではないのでしょうか。なぜ人間だけが環境問題を起こすのかということを見ると、人間はアリとは違って自然のルールに従っていないのではないのでしょうか。自然というのはたった一つの方法に集中しようとはせず、常にバックアップをします。あるいは常に地方分権をします。ミツバチは、いろんな場所に咲く花から蜜を集めて来るので、花が一か所に集中している必要はありません。一つ一つの花の蜜は非常に少量だけでも、いろんなところから集めてくる。人間がこれをやろうと思うと、とてもできない。機械でやろうと思ってもとても効率が悪い。私が今やっているのはCSR企業の社会的責任、レスポンスアビリティを高めるということをお手伝いしていますが、自然の法則に従うビジネスに変えていくということも、これも一つのレスポンスアビリティだと思うんです。これが、持続可能なビジネス、持続可能な社会を作っていくものであると考えています。2050年の持続可能な社会につながるような明確な道筋、これをいろんな企業の方に示すことをやっています。

3【やる】 ～農業への挑戦～ 報告者・バズセッション助言者

稲葉 光國(いなば みつくに)



メッセージ

日本の農家を守るには、農家が作ったものを再生産が可能な適正な価格で買ってくれる消費者の存在が必要です。日本の農家を守る消費者とは、有機農産物を買う消費者です。有機農産物なら、外国からの輸入のオーガニックより安く、鮮度もよいものが消費者に供給できます。これで危機に瀕している米作り農家を支援して欲しい。これに加えて、小規模や兼業の有機農家への環境支払い制度が導入されれば、食料自給率の向上にも貢献できます。

S.43(1968) 東京教育大学大学院修士課程修了(農学研究科)

S.46(1971) 栃木県立真岡農業高校勤務 H.9(1997) 同上退職 民間稲作研究所設立 H.11(1999) NPO 法人 民間稲作研究所理事長 H.12(2000) 有機農産物の登録認定機関となる

要約

有機稲作というと大変だという感想がありますが、私どもが実践している有機稲作というのは、田んぼの中の生き物たちにできるだけ復活して頂いて、その助けを借りて有機稲作をするという発想なものですから、実は大変簡単でお金もかからないのです。例えば、4月に入ってすぐに代掻きをするのです。その周辺の田んぼで一番早く水が入る。そうすると、ヤマアカガエルが繁殖しやすくなるのです。このアカガエルは実はカメムシの防御を一番一生懸命になってやるのです。アマガエルは、斑点米の原因となるカメムシを58%が捕食しているということで、生物多様性が害虫防除の面で門戸を開いてくれた訳です。ただ、私は実は害虫という言い方をすべきではないと思っておりまして、警告昆虫と大変ありがたい存在だととらえるようにしています。このような生き物をはぐくむ農業、そしてその力をお借りして、有機稲作を営むという手法が全国的にもずいぶん広がりを持ってまいりました。兵庫県豊岡のコウノトリ復活運動と有機稲作、佐渡のトキ米、これも基本的な考え方は同じで、生き物を中心にした農法なのです。有機稲作は難しくありません。今、農家は後継者が非常に少ないのです。このまま行ったら、皆さん、有機米を食べることができなくなってしまいます。最近始まっている、屋上で田んぼを是非広めて頂いて、皆さんも少しずつでも良いので稲作をやって頂いて、そこから本格的な農業の敷居が下がっていくと思いますので、是非、皆様方の力もお貸し頂ければと考えております。

4【気付く】 ～本来農業を行く～ 報告者・バスセッション助言者

石黒 功(いしぐろ いさお)



メッセージ

愛知県東三河地域は日本でトップクラスの農業生産高の地域です。しかしながら、その当地においても遊休農地の拡大、後継者問題、農業生産高の減少と多くの課題を抱えています。それらの問題の解決の一助とすべく、日本の農業の現状を中立的に解説し、問題解決のための提言書「本来農業への道」を一昨年末に発刊させて頂きました。農業環境フォーラムで皆様と、持続可能な農業について一緒に考え行動を開始する事ができれば幸いです。

一般社団法人 本来農業ネットワーク代表理事 イシグログループ代表。農業用資材(温室、肥料、農薬、種苗など)の提供を行うイシグログループ(愛知県田原市)代表。同社は「生命を育む」を社是とし、農業生産システムの提供を通じ、安全性が高く滋養豊かな農産物の生産を支援する事を目指している。

要約

私は、愛知県田原市で農業資材を扱う会社の3代目で、今日ここにいらしている方々と相反する会社、農薬を売っている会社を営んでいます。愛知県田原市は日本一の農業生産を誇る市で、農家一軒当たりの農業生産額もおそらく日本一だと思いますが、その田原市でも遊休農地の問題、後継者不足の問題があります。日本には本当に多くの農学博士が居ますが、農業をできる博士はほとんど居ません。そういう中で人材育成の重要性を認識し、農業経営者はどうあるべきなのかという人材育成、公共教育機関を作りたいという思いで活動をしてまいりました。本日ここにもいらしている木内さんの全面的な支援を受けて、本来農業の道という本を作りました。日本の農業生産の96%は慣行栽培、3%が環境保全型農業、有機農業は公式データでは0.18%、自然農法に至ってはほとんどゼロという状況です。有機農業は良い面はたくさんありますが、全部を有機農業にすれば良いということではありません、そこで、本来の農業を見直したいということで、この本を作ったところです。良い農産物を作るためには土が健康であることが必要です。土が病気になれば、植物が病気になり、病気の植物を食べれば動物も人間も病気になる。土を健康にするためには、生物多様性が重要であり、単一のものだけを育てはいけません。良い農産物、商品を作ることも重要だが、それだけではなく信頼を築くことが大切。こういった取り組みを通じて、農業経営者の応援をしていきたいと考えています。

5【治す】 ～ミツバチ目線～ 報告者・バスセッション助言者

藤原 誠太(ふじわら せいた)



メッセージ

何万年も食されてきた事実がハチミツの有益性を物語っている。しかし、ここ数年ミツバチ達が大量死している。農薬に被爆したミツバチが巣に戻れずもがきながら死んでいく光景を日夜目の前にして何もしないことが許されるのだろうか。

1975年岩手県盛岡生まれ。東京農業大学卒業。卒業後日本ミツバチの魅力に取りつかれる。

藤原養蜂場長。日本在来種みつばちの会会長。東京農業大学客員教授。

著書:「日本ミツバチ在来種養蜂の実際」

要約

皇居の周辺には花の力はまだまだあるので、巣箱を置ける場所を探していたところ、銀座にいいところがあると言われて来てみたら、狭く、だまされたと思いました。相手は場所を貸して、ハチミツがもらえるならいいやという感じだったが、断るのも忍びないのでやることになったというのが、紙パルプ会館の屋上の養蜂のはじまりです。一般の方々にはミツバチとスズメバチの区別もつかない方も多いです。ミツバチがいるからということで見に行ったら、クロスズメバチだったということもあります。ミツバチの中でも、日本ミツバチは、西洋ミツバチと同じような巣箱では飼うことができず、最初、私が日本ミツバチで養蜂をしようと言い出したときには、学者もどの養蜂家も商業的な養蜂には成功していませんでした。巣の直径を狭くするなどの試行錯誤を20年間に渡りしてきた結果、日本ミツバチによる商業的な養蜂が行えるようになりました。銀座でミツバチを飼う、飼うというより、共存と捉えるべきだと思いますが、刺されないのか、部屋に入ってこないのかという心配の声がありました。皆さんも今日ここに来ているので、この考えになっているかもしれないが、部屋に戻ったら、虫が部屋に入ってきたら大騒ぎをするのではないのでしょうか。だいたいどこの家にもキンチョールがあって、すぐに虫は殺してしまうが、蜂が入ってきたときには、部屋の電気を消して、網戸を開けてやればすぐに出て行きます。今日のこの会を通じて、人間にとって安全なものが良いのか、昆虫の目線、ミツバチの目線で何が良いのかを考えて行きたいと思います。

6【つなぐ】 ~田んぼにいこう~ 報告者・バスセッション助言者

中村 陽子(なかむら ようこ)



メッセージ

農薬・化学肥料を使わず冬も水をはった田んぼは、生きものがいっぱい。

6月の畦を歩くと、アカガエル、アマガエル、トウキョウダルマガエルたちがあわてて田んぼに飛び込み、草取りをしていると、稲につかまったヤゴ殻やコオイムシ発見。

でもこんな楽しい田んぼは、まだ1%に満たないのです。みんな、メダカのがっこうと一緒に“いのちの田んぼ”を応援してね。

主婦。

病弱のお母さんの面倒を見ながら、今日は北へ、明日は南へと田んぼや講演会場を飛び回っている。

どんなことがあっても、家族の食事づくりに手を抜かないことがモットー。

要約

メダカのがっこうの活動を紹介させていただきます。レイチェルカーソンは「沈黙の春」に気がつきましたが、1970年代から日本の田んぼは、知らない間に「沈黙の田んぼ」になっていたのに誰も気づかなかったのです。2003年に田んぼの生き物調査をして初めて分かりました。沈黙の田んぼは農薬を使って1年のうち8ヶ月以上乾かしてしまう田んぼです。私たちが行っているのは命を育む冬水田んぼです。基本的に水を張ることをモットーにしています。冬水田んぼでは、生き物がたくさん育つことができます。イトミミズは抑草効果がありますし、先ほど害虫は警告昆虫だというすばらしいコメントがありました。アマガエルは警告昆虫をよく食べます。また、ナガコガネグモはカメムシを食べるので、カメムシを防除する必要がありません。このような活動をする消費者と農家が生き物を守らないと、という同士になり、まったく関係が変わってきます。私たちの活動として、生き物を増やすために田んぼの中にビオトープを作ったり、カエルが田んぼの間を行き来できるようにするため、U字溝にフタをする取り組みもしています。メダカのがっこうは農薬、化学肥料を使わず、冬水田んぼでトキのエサ場となる田んぼで生産したお米を売ったりしています。国土の保全費も含めてお米を買ってくださいと商社とかスーパーとかお結び茶屋、にトキひかり（トキと田んぼを守る会で作ったお米）等を取りあつかってもらっています。私たちはお米を高く買ってもらうという意識ではなくて、こんなにすばらしい田んぼを守ってくれて技術のある有機農家がこれからいなくなってしまう、だから自分で作るとかして手伝う働き手になろうと考えています。

7【創る】 ～自分で耕す～ 報告者・バスセッション助言者

藤崎 健吉(ふじさき けんきち)



メッセージ

頭で考えることも重要だけど、とにかく土に触れること。

農と向き合う時間を継続的に持つこと。

自分で作った野菜を料理して食すこと。

これが食と農・環境を理解する第一歩だと思っています。

プランナー、バイオマスタウン・アドバイザー。東京農業大学農学部卒。環境と健康、食と農、街と交流をテーマに、都市の中の農的環境づくり、家庭内のCO2削減見える化、医療と健康を原資とした街づくりなど様々なプロジェクトに参画。

要約

今日は、「作る」というテーマで、「柏の葉フューチャービレッジ」というところで行っている活動を紹介させていただきます。10年ほど前から、相模大野で1反ほどの生産しない畑を試験圃場としてやっています。いろいろなものを採って気づいたことは、野菜というのは100均一で売っているレタスもキュウリも玉の大きさが同じだったりしますが、1週間採り忘れてしまうと大きくなったりします。そういうものを通じて、実は野菜はモノじゃなくて命なのだなんて実感したわけです。柏の葉フューチャービレッジは、環境、健康、サステナビリティ、交流ということで、ベッドタウンではない、そこに住みながら生きていけるような街を作ろうと始めました。未来を自然だとか人とのつながり、食、環境などを施設の面からも考えられる拠点です。創エネ、省エネ、見える化ということで、全体で65%ぐらい、CO2削減を図っています。この中で、コミュニケーションにみんなが気軽に入って来られる啓発ツールとして、食あるは農業を使わせてもらっています。野菜やハーブを立体的にアレンジして、こういうものを皆さんに採ってもらって議論して頂く、街を創造して頂くといったことをしています。今、農業の問題について一般の生活者の方々も関心があると思うんですね。ところが、どこから入っていったらよいか分からない。じゃあ何をしたらよいかと良く聞かれるんですが、都市生活者としてとにかく土や農と関わってみるということ、収穫したものを、自分で料理して食べてみよう、そうすると必ず新しい発見があるよということです。みんなに知ってもらいたいと思うのは、農業というのは、工業と違って単一のものを大量生産するのではなくて、「いのちを育てる」業かなと思います。それを食べるというのは「いのちをいただく」ということを考える行為、これが「農」を五感で感じるということかなと思います。

8【変える】 ～政策を作る～

郡山 昌也(こおりやま まさや)



メッセージ

ヨーロッパでは、1992年から環境を保全し、生物の多様性を守る有機農業や環境保全型農業に取り組む農家に対して、農村の環境や景観を守っている対価を直接支払う「農業環境政策（環境支払い制度）」が施行され、慣行農業からの転換を大きく後押ししました。ほぼ同時に導入された有機認証制度との組み合わせで、EUの有機農業とオーガニック食品市場は全体の4%近くにまで広がっています。その日本への応用について考えます。

国際 NGO「国際有機農業運動連盟(IFOAM)」世界理事。有機・低農薬野菜と無添加食品の宅配会社、らでいっしゅぼーや(株)環境保全型生産者団体 Radix の会事務局。ロンドン大学経済政治大学院(LSE)政治学修士。早稲田大学大学院博士課程に在籍。名古屋産業大学非常勤講師。

要約

私は15年くらいらでいっしゅぼーやで広報の仕事をしておりました。日本でも有機農産物のマーケットが広がってきているのですけれど、もっと進んでいるヨーロッパでどうしてここまで進んでいるのか見ていきたいと思い、一番有機が進んでいるドイツとイギリスのほうに3年間留学しました。そこで2つの大きな仕組みがあることに気がきました。一つは有機認証制度というもので、もう一つは農業環境政策という2つの仕組みが有機農業とマーケットを広げているのではないかという風に思っております。ヨーロッパでは4%くらい有機認証です。先ほどの石黒さんの話では日本は0.18%ということでしたが、それよりも20倍くらいすすんでいるわけです。何ここまで進んだのかという一つの大きな仕組みとして農業環境政策があると思っております。第2次世界大戦後ヨーロッパは非常に自給率が下がり、国の政策として農業を広げたわけです。ドイツでは環境保全型の農業に対して対価を払うなどが行われました。やはり有機農業や低農薬で有機認証を取るまでにリスクを負います。そこを税金で補うと言う仕組みです。これが非常に大きな投資になりまして、有機農業への転換が92年以降非常に進みました。日本にも農地水環境保全向上対策のような直接環境支払いに近い制度がありますが、中々有機農業を行う人に適応できなかつたりします。他にも、有機 JAS はあるのですが、中々有機農業をやっている方に入っていけない、又その逆もある所を何とかして頂ければと思います。銀座でこういうフォーラムをやることで消費者にいかにも有機とか減農薬とかをやっていることを知って頂き、後押しして頂ける仕組みが作ればと思いますご紹介させていただきました。

13:00～14:00 銀座の屋上農業体験～銀座が農業でおもしろい！～

銀座の屋上体験ということで、紙パルプ会館屋上のミツバチ、銀座ブロッサム屋上の屋上農園、白鶴酒造東京支社の屋上の稲作の3つの都会での農について、それぞれのグループで最も適切な場所を見学して頂きました



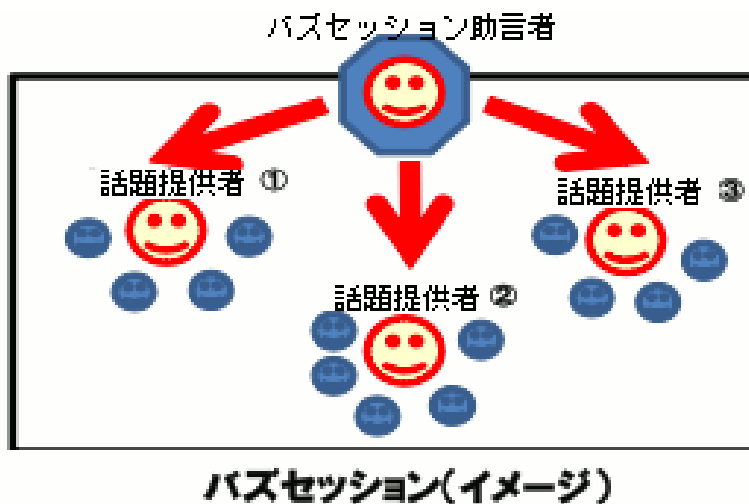
14:30～16:00 バズセッション

フォーラムの中でも一際異質だったのが第3部のバズセッションでした。

その業界の第一人者のグループ話題提供者1人につき、お互いに全く面識の無い皆様を10人くらいを1グループとして集め、2時間ほどで課題に対して一つの結論を出して頂くという異例のセッションがありました。

その話の記録や結論作成には、農林水産省の若手の皆様が30人位ボランティアで集まっていた頂き、記録係などをして頂きました。

第一人者の話を聞くだけでなく、彼らと一緒に生物多様性を守る有機農業や環境保全型農業、おしくて楽しい食の安全を拓げていくにはどうすればいいのか？について、「一緒に考えてみよう！」というこれまであまりなかった試みでした。



【各グループの話題提供者】*一人称で語れる24人の皆さんにお願いしています。

1 【生き抜く】 ～命をいただく～

- ・境真佐夫(泥武士代表)
- ・中村和代(朝日エル社長)
- ・安井浩和(アンテナショップ こだわり商店 早稲田)

2 【正す】 ～私たちと自然の法則～

- ・木内孝(イースクエア)
- ・岡山慶子(朝日エル会長)
- ・廣瀬光子(日本自然保護協会)

3 【やる】 ～農業への挑戦～

- ・郡山昌也(国際有機農業運動連盟(IFOAM)世界理事)
- ・鈴木悌介(小田原鈴廣副社長)
- ・久松達央(有機栽培農業者)

4 【気付く】 ～本来農業を行く～

- ・服部徹(アースデイ・エブリデイ)
- ・大橋進吉(本来農業ネットワーク事務局長)

5 【治す】 ～ミツバチ目線～

- ・星野智子(環境パートナーシップ会議副代表)
- ・高橋晶子(日本熊森協会関東支部長)
- ・永井 聡(銀座ミツバチプロジェクト理事)

6 【つなぐ】 ～田んぼにいこう～

- ・根本伸一(メダカのがっこう副理事長)
- ・土屋献一郎(人と企業の研究会代表世話人)
- ・相澤菜穂子(ワクワク食育教室代表)

7 【創る】 ～自分で耕す～

- ・須藤美智子(環境パートナーシップ会議)
- ・伊藤博隆(環境パートナーシップ会議理事)
- ・牧野 ふみよ(グリーンワークス代表)

8 【変える】 ～政策を作る～

- ・郡健次(農林水産省)
- ・川島豪紀(日本農業新聞記者)
- ・野津喬(農林水産省)

1 【生き抜く】 ～命をいただく～ 話題提供者

境 眞佐夫(さかい まさお)



メッセージ

おいしい事と安心安全な事は 別々でなく ひとつの事 生きているものの命をいただく感謝をわすれずにいただきます

熊本市出身。大学卒業後 5 年間の米国料理修業を経て、82 年熊本市にデーブスレストランを開店。93 年の泥武士開店以降、オーガニックの啓蒙とともに、オリジナル商品の開発・提供を開始。99 年より東京進出、銀座に「ぎんざ泥武士」、青山に「45day」等を出店。

1 【生き抜く】 ～命をいただく～ 話題提供者

中村 和代(なかむら かずよ)



メッセージ

重い病気や心の疲れで元気をなくした人たちも、好きなものなら食べられる。食べることで元気がよみがえる！心をこめて作られた素材や料理は、すごいパワーで人を生かす。そして、けして捨てられない…

大阪で生まれ、7歳まで育つ。おいしいものや旬のもの、いいものは分け合い伝え合いたい。(株)朝日エルの社是は「自分たちが良いと思ったことを仕事にする」。健康や介護、サステイナブルに関わる情報の分かち合いが使命？と思っている。

バズセッションの概要

テーマ: 生き抜く～命をいただく～

グループ話題提供者: 境真佐夫氏、中村和代氏

記録係: 細谷紀子氏

テーマについての現状認識

食が空腹を満たすだけの手段になっている。
命をいただくことが、その牛、豚、鶏、魚だけでなく、その先の命もいただいているということが分かっていない。

理想とする姿、あるべき姿、実現すべき社会

作る人、食べる人がつながっている社会



を実現する上での障害

品位と節度がなくなっている。
食に対する姿勢が雑になっている。

提言、結論、まとめ

食べることを命をいただくということ、そのお陰で、私たち人間が命をつないでいくということ。
人間も自然と生きる生物。

つまり → 「命への感謝」

1【生き抜く】 ～命をいただく～ 話題提供者

安井 浩和(やすい ひろかず)



メッセージ

生産者と消費者を結ぶ役割である「販売者」というポジションで毎日店頭に立たせて頂いてます。

生産者の代弁者、そして消費者の代弁者として「販売者」とは何かを日々学ばせて頂いております。

「販売者」だから出来る事は何か？毎日の両者との対話の中にヒントがあると思います。

1978年早稲田で生れる。父の経営するミニスーパー「稲毛屋」で3歳から働く。平成19年10月に独立し早稲田の町に貢献する店「アンテナショップこだわり商店」を早稲田でオープン。高齢者雇用・障害者就労支援など様々、「良い事」を実践中！父は小泉チルドレンの1人、衆議院議員の安井潤一郎。

バズセッションの概要

テーマ:生き抜く～命をいただく～

グループ話題提供者:安井浩和氏

記録係:田島直子氏

テーマについての現状認識

命あるものをどう使うか
生かされていることの実感がない
土のつながりの再構築が見えない
経済発展を追い求めるか否か

理想とする姿、あるべき姿、実現すべき社会

経済発展のみを追い求めるのではなく、生かされているという認識をもつ。

← を実現する上での障害

農業の業にばかり焦点を当てて考えている。

提言、結論、まとめ

日本の農業について、都市と農村、世代、ポリシーを超えて考えることが大切である。

つまり → 「対話とコラボ」

2【正す】 ～私たちと自然の法則～ 話題提供者

木内 孝(きうち たかし)



メッセージ

私達も自然の一部、自然に就いてもっと知る努力をしよう。「自然の法則」こそ生きる為の原則と考えよう。常に自然に良いか、悪いかを考えながら暮らしていると、次々と「気づき」が生まれます。

屋根には太陽光パネル、排出するCO2はオフセット、猛烈歩き、自転車に乗り、タクシーに乗らない行動派。儉約・健康・謙虚の「三ケン」で生きるがモットー。NPOフューチャー500をアメリカで設立、(株)イースクエアの共同創業者。

2【正す】 ～私たちと自然の法則～ 話題提供者

岡山 慶子(おかやま けいこ)



メッセージ

「～の方が良かったです。」という考え方を捨てよう。本当に正しいことは良かったですでは有り得ない。失敗しても構わない。考え直しても大丈夫。小手先ではなく正しいということを深く考えるくせをつけよう。

(株)朝日エルを設立し、社会貢献とビジネスの融合をはかって25年。環境の保全、人々の幸せ、経済の発展のトリプルトップラインをさらに目指すため、また新たに(株)朝日サステナビリティ・マネジメントを設立。

バズセッションの概要

テーマ: 正す～私たちと自然の法則～

グループ話題提供者: 木内孝氏、岡山慶子氏

記録係: 鈴木裕氏

テーマについての現状認識

- ・ いま一度、人間と自然の関係をどう考えるか見つめなおす必要がある。

理想とする姿、あるべき姿、実現すべき社会

- ・ 自然に加えてもらう生活
- ・ 次の世代が住みよい社会
- ・ 人間の生活を持続可能とするために、自然をどう使うのかを考える。

← を実現する上での障害

- 共通のストーリーを持つ必要があるが...
- ・ 世代間の意識の違い
 - ・ 様々な考え方のコミュニケーションの機会の不足
 - ・ 知識、技術は時代により変化する。

提言、結論、まとめ

- ・ 生態系を学ぶ。
- ・ 人間を学ぶ。
- ・ 体験する。
- ・ 人に話す。

つまり → 「学ぶ」

2【正す】 ～私たちと自然の法則～ 話題提供者

廣瀬 光子(ひろせ みつこ)



メッセージ

地域の自然を守るのも壊すのも、そこに住んでいる人自身です。どんな形で自然という財産を未来の世代に引き継げるのか。それを考えるために、まずは身近な自然を見つめ直し、記録に残してください。

それが、夢のある未来を描く大切な一歩です。

2001年より(財)日本自然保護協会保全研究部所属。専門は植物生態学、自然環境保全。現在の主なテーマは市民との協働による里やまの保全。環境省からの請負事業「モニタリングサイト1000里地調査」では、全国の里やまに足を運び、調査や保全活動を進めている。

バズセッションの概要

テーマ: 正す～私たちと自然の法則～

グループ話題提供者: 廣瀬光子氏

記録係: 新保貴裕氏

テーマについての現状認識

- ・「生物多様性」という考え方自体が漠然としてあまり浸透していない。
- ・戦後、拡大造林、農業の使用量増など、生産性・効率性を上げる方向に社会が進み、生物多様性が失われてきた。それに気づき、ようやく「行動」がではじめてきたところ。

理想とする姿、あるべき姿、実現すべき社会

「生物」に限らず、経済、便利さ、地域の特色など様々な多様性がある社会

← を実現する上での障害

時間やお金の面で「効率」ばかりを求めてしまう人間と考え

提言、結論、まとめ

- ・人間だけの目線ではなく、植物・動物など様々な目線でとらえて、不自然なことは正していく。
- ・1つのものさし(考え方)に偏ってはいけない。

つまり

「多様な価値のものさしを持つよう」

3【やる】 ～農業への挑戦～ 話題提供者

郡山 昌也(こおりやま まさや)



メッセージ

ヨーロッパでは、1992年から環境を保全し、生物の多様性を守る有機農業や環境保全型農業に取り組む農家に対して、農村の環境や景観を守っている対価を直接支払う「農業環境政策(環境支払い制度)」が施行され、慣行農業からの転換を大きく後押ししました。ほぼ同時に導入された有機認証制度との組み合わせで、EUの有機農業とオーガニック食品市場は全体の4%近くにまで広がっています。その日本への応用について考えます。

国際 NGO「国際有機農業運動連盟(IFOAM)」世界理事。有機・低農薬野菜と無添加食品の宅配会社、らでいっしゅぼーや(株)環境保全型生産者団体 Radix の会事務局。ロンドン大学経済政治大学院(LSE)政治学修士。早稲田大学大学院博士課程に在籍。名古屋産業大学非常勤講師。

バズセッションの概要

テーマ: やる～農業への挑戦～

グループ話題提供者: 郡山昌也氏、鈴木梯介氏

記録係: 佐々木信也氏

テーマについての現状認識

- ・ 「食べること」=「命」
- ・ 現在は「命」の循環が切れている(例えば...冷凍食品で簡単に食事を済ませる)
- ・ 一方で、有機野菜を食べるだけでは、食べ物本来の力は得られない。

理想とする姿、あるべき姿、実現すべき社会

子供達に食(本来の自然な場)の現場を知ってもらい、おもしろいと思ってもらえる農業。

を実現する上での障害

- ・ 昔ながらの食の伝統が次の世代に伝わっていない。
- ・ 子供達に食の現場を知ってもらうためには親の参加が必要。

提言、結論、まとめ

- ・ 押しつけではなく本人に気づいてもらうために感性(おいしい、楽しい、美しいなど)に訴える取り組み。
- ・ 消費する立場だけでなく、「生活者」として一つでも身近な取り組みを！

つまり

「食(命)の現場を感じてもらう」

3【やる】 ～農業への挑戦～ 話題提供者

久松 達央(ひさまつ たつお)



メッセージ

有機野菜は「安全な野菜」ではなく「健康な野菜」です。農薬を使う使わないとか、〇〇という資材を使うとどうだ、とか瑣末なことにとらわれず、美味しくて栄養のある食べ物を増やしていくことが大事だと考えています。

1970年 茨城県生まれ。1994年 慶応義塾大学経済学部卒業。帝人入社 工業用特殊繊維の輸出を担当

1999年秋 同県新治村(現土浦市)で営農開始 3haの畑で年間50品目の有機野菜を生産・販売(全量直販)

出荷先は消費者7割、直売所・レストラン3割。モットーは「安全より健康」「食味第一」

バズセッションの概要

テーマ:やる～農業への挑戦～

グループ話題提供者:久松達央氏

記録係:伊藤里香子氏

テーマについての現状認識

野菜は高い?安い?

- ・ 生産者は品に見合った価格で売りたい(今は安すぎる)
- ・ 消費者はなるべく安く買いたい

理想とする姿、あるべき姿、実現すべき社会

農産物が質に見合った価格で売れる社会

← を実現する上での障害

生産サイドと消費サイドのコミュニケーション不足

提言、結論、まとめ

良いものを知っている消費者を増やして、スーパーで「安い方」ではなく、「おいしいから百円高くてもこっち」を選ぶ人を増やそう!

つまり → 「相互理解」

4【気付く】 ～本来農業を行く～ 話題提供者

服部 徹(はっとり てつ)



メッセージ

「都市の人たちが「エコ」ライフを契機に農業へ熱いまなざしをおくっています。「本来農業」と「都会人」の出会い。農をやってわかることがある。買い方も嗜好も変わる。「健康的で充実した人生と社会」が動き始めます。当日は、生物多様性とわたしたち、そして農業についての、インターネットアンケート調査の結果を皆様に話題としてご提供いたします。

生物多様性条約市民ネットワーク 運営委員会／普及啓発作業部会 副部長
東北大学 大学院 環境科学科修了（認定 環境プログラムオフィサー）
主な著書：ブックオフ情熱のマネジメント（共著）

4【気付く】 ～本来農業を行く～ 話題提供者

大橋 進吉(おおはし しんきち)



メッセージ

日本の農業は危機的な状況にあります。しかし、今は農業が変革する大きなチャンスの時だと痛感しています。命の糧である食料を生産する農業の素晴らしさと共に、生き物である農産物の生産の難しさと、農業の持つ可能性の大きさは、第二次・三次産業とは比べようもありません。皆様と共に、農業の素晴らしさの発信ができれば望外の喜びです。

一般社団法人 本来農業ネットワーク事務局長 イシグロ農材(株)社長室長
イシグログループ内でIPM(総合防除)推進部門を担当した後、
2007より、提言書「本来農業への道」の発刊に従事。本来農業ネットワーク設立に従事

バズセッションの概要

テーマ: 気付く～本来農業に行く～

グループ話題提供者: 服部徹氏、大橋進吉氏

記録係: 加藤史彬氏

テーマについての現状認識

現状認識として、日本の自給率や農業就業人口に関する「気づき」を得た。また、生物多様性に関する気づきとして、日本人の生物多様性への関心はまだそれほど高くはないことを「気づき」として得た。また、農業のことが「いのちをはぐくむ産業」であることを再確認した。

理想とする姿、あるべき姿、実現すべき社会

キーワードとして「多様性」「共存社会」が挙げられた。具体的には、田舎暮らしができる、若い人が農業に入っていける、コミュニケーションツールとしての農業、都市のお金が地方の農村に流れるシステム、などが挙げられた。

← を実現する上での障害

共通するキーワードとして、「ミスマッチ」「顔が見えない」「壁がある」が挙げられた。農業や環境に対する「気づき」は昨今醸成されつつあるが、そこをうまくつなげる場やしきみづくりが欠けている、という意見が得られた。

提言、結論、まとめ

「多様性」といっても環境について、人についてなど、様々な側面での多様性がある。そのつながりに気づき、行動していくということが重要である。という結論に至った。
最後に、セッション参加者全員が矢野さんの農場に行こう！ということになった！

つまり

「多様な気づきをつなげる土づくり」

5【治す】 ～ミツバチ目線～ 話題提供者

星野 智子(ほしの ともこ)



メッセージ

自然のめぐみがあつてこそ私たち。
感謝しながら、他の生物も日本のヒトも海外のヒトも、今のヒトも未来のヒトも、みんなが心豊かに暮らせる社会をつくるには・・・
と、皆さんと語り合いたと思います。

さまざまな「つなぐ」をテーマに市民活動の促進に日々関わっているネットワーカー。千葉県での食農体験企画「土の学校」主宰、「生物多様性条約市民ネットワーク」運営委員、「NPO 法人アフリカ日本協議会」理事。”生物多様性”をわかりやすく伝える翻訳作業を探求中。

バズセッションの概要

テーマ: 治す～ミツバチ目線～

グループ話題提供者: 星野智子氏

記録係: 伊藤有里子氏

テーマについての現状認識

子供向けに食育・農業体験等やっているが、むしろ親の世代にそういった認識が弱い

理想とする姿、あるべき姿、実現すべき社会

- ・ 生命と食のつながりを理解
- ・ 様々な立場の人がネットワーク形成
- ・ きちんとした物を消費者が選択できること

← を実現する上での障害

- ・ 環境と生活のつながりを意識できていないこと
→ 点はあるが面はない。
- ・ 便利さに慣れすぎた消費者

提言、結論、まとめ

- ・ 「おかしい」のはわかっている→「Action」をどうするか。考え方を少しかえるだけでできることは多い。
- ☆ 大人向け教育の必要性
- ・ つながり、多様な生命の循環→はちが教えてくれた

つまり → 「生命のつながり」

5【治す】 ～ミツバチ目線～ 話題提供者

高橋 晶子(たかはし あきこ)



メッセージ

世界に向ける関心と同様、わが国における自然の病んだ現状を見て欲しい。野生動物や昆虫が発信するメッセージを謙虚に受け止め、人間はいかに行動すべきなのか？
自然に学び行動しなければ何も変わらない。今回のセッションはそのためのスタートラインだ。

実践型自然保護団体：日本熊森協会関東支部長

愛飲しているジェイソン・ウィンターズ・ティーがエネルギー！自然の恵みに感謝！

EOS 会員

「健康」「調和」「感謝」をモットーに、次世代へ繋ぐ自然の保護と復元がライフワーク

バズセッションの概要

テーマ：治す～ミツバチ目線～

グループ話題提供者：高橋晶子氏

記録係：奥西麻衣氏

テーマについての現状認識

- ・ 現在、ミツバチは①農業、②地球温暖化などの影響により減少。
- ・ 意識次第で「ミツバチ目線」になることはできる。気づかなかったことに気づける。(ただし、意識しないと気づけない。)

理想とする姿、あるべき姿、実現すべき社会

- ・ 自然治癒力を活用する。(例：消毒・洗剤ではなく、微生物の浄化能力を活用する)
- ・ 子供から大人まで、「人間目線」だけでなく「ミツバチ目線」を意識できるような社会。

← を実現する上での障害

- ・ 子どもたちに気づきのチャンスを与えられる場が少ない。(シンポジウムも子ども向けに開催しても良い。)
- ・ シンポジウムなどに来る人は限られており、来ない人にどう伝えるか。

提言、結論、まとめ

- ・ 環境教育の場を広げる。
- ・ 五感で感じさせることが一番。
- ・ 環境から「喜び」を得るという経験が必要。
- ・ 当事者意識を持つ。

つまり → 「自分の好きなことを守りたい」と思うこと」

バズセッションの概要

テーマ: 治す～ミツバチ目線～

グループ話題提供者: 永井聡氏

記録係: 西留ちはる氏

テーマについての現状認識

過疎化が進む地方、養蜂業者間での情報が共有されない、有機農法や養蜂業の推進がされているが、採算に見合わない。養蜂をする時に周囲の理解を得にくい。

理想とする姿、あるべき姿、実現すべき社会

閉鎖的でなく、コミュニケーションをとり情報共有できる環境。農業を使用しない農業。耕作放棄地の復活。採算のとれる経営。

← を実現する上での障害

農業を使用しないと農協で買ってもらえない。個人で販売、販路を確保するのは大変。過疎化。情報量が地方にはたりない。

提言、結論、まとめ

都心から地方にはさまざまな手段で情報の発信をしていく。
インパクトを与え人を引きつけることでの地方の活性化。簡単にまとめることができないほどの問題があるのに、国の政策は実情に馴染まず農家(地方)は苦しんでいる。

つまり → 「情報発信」

6【つなぐ】 ～田んぼにいこう～ 話題提供者

根本 伸一(ねもと しんいち)



メッセージ

田んぼの草取りや、野菜の収穫作業に出かけると、とたんに農家の表情が一変する。

「たいしたことできないよ」というと、「よく来てくれたね。来てくれるだけで元気が出るのさ」と、目が輝く。都会人の目もいきいきしてくる。

元経済雑誌の編集長。

バブル崩壊後、新たな動きを取材しているうちに、生きものいっぱいの田んぼに出会う。その普及活動が、いまやライフワークに。

バズセッションの概要

テーマ: つなぐ～田んぼにいこう～

グループ話題提供者: 根本伸一氏

記録係: 我部山彰則氏

テーマについての現状認識

都市と農村、生活者と消費者を「つなぐ」ことが重要。
消費者が生産者の顔を見たいのと同時に、農家の方も消費者の顔を見たい。
多様な生き物がある「田んぼ」の役割は大きい。

理想とする姿、あるべき姿、実現すべき社会

都会の人は農業を手伝うことで、農家と交流し、農業への理解が深まる。農家の人は都会の消費者と農作業を行うことで、喜びを共有できる。具体的には...
「メダカのがっこう」の活動(都市から佐渡へ草とりの手伝い)(オーナー制をとり、定期的にお米を届ける)

← を実現する上での障害

活動がなかなか広がらない
→ 最近は徐々に広がりを見せているが、さらに広げる必要。

提言、結論、まとめ

様々な活動を通じ、都会の消費者と農村の生産者を「つなぐ」
全国各地で、都市と農村とのネットワークを形成

つまり → 「生きもの」と「農産物」がつなぐ都市と農村」

6【つなぐ】 ~田んぼにいこう~ 話題提供者

土屋 献一郎(つちや けんいちろう)



メッセージ

リタイア後の田園生活準備の為、米作り・野菜づくりに取り組み始めた頃に「NPO法人 メダカのがっこう」に出会いました。いつの間にか、「メダカのがっこう」の生きものいっぱい田んぼの応援団として10年近くとなります。いよいよ今年から、本格的に田園生活をはじめることになりました。自給自足を目指し、のんびりと農作業三昧の生活に取り組んでいこうと思っています。

6【つなぐ】 ~田んぼにいこう~ 話題提供者

相澤 菜穂子(あいざわ なほこ)



メッセージ

子供達は田んぼに来るとまるで田んぼの生き物になったように走り回ってお腹を空かせ、お昼ごはんの塩むすびにかじりついています。田んぼ体験は食育の実践そのもの。参加されてお米の大切さや生き物が好きになったという親子の声がたくさん届きます。

管理栄養士として20年のキャリアの中で健康管理からメニュー作りなどいろいろな分野で食の仕事をしてきました。

ごはんをこよなく愛し、日本食の素晴らしさと農業の楽しさを伝えるべく、食育活動を行っています。

バズセッションの概要

テーマ: つなぐ～田んぼにいこう～

グループ話題提供者: 土屋献一郎氏、相澤菜穂子氏

記録係: 長野誠司氏

テーマについての現状認識

農業が立ち行かなくなりつつある。
一方で、消費者の方も、何とかしなくてはいけないと思っている人もいる。(全く意識の低い人が多いのも事実)

理想とする姿、あるべき姿、実現すべき社会

農家の現実(サラリーマンの倍働いても、収入は半分)を理解し、消費者が買い支えることにより支援すること。

← を実現する上での障害

消費者の意識が低く、「高い」ものを買ってくれない。
→ いろいろな体験を仕組んでも、体験止まりで行動に結びつかない。米、ご飯茶わん一杯の価格は高くないことが理解されていない。

提言、結論、まとめ

体験を実践、行動に結びつける仕掛けが必要



「子供のときからの体験を実生活に活かせるように育てることが大切」

7【創る】 ～自分で耕す～ 話題提供者

須藤 美智子(すどう みちこ)



メッセージ

都会の真ん中の小さな畑を地域の老若男女みんなで耕しています。畑が地域の大切な場所になることを願い、いろいろな仕掛けを提案中。

本フォーラムで、志ある方々とつながり、みんなで大きな一歩が踏み出せることを期待しています。

1996年より地球環境パートナーシッププラザ(GEIC)に勤務。
GEICの運営団体、環境パートナーシップ会議(EPC)理事・事務局長。
日本ボランティア・コーディネーター協会理事。

7【創る】 ～自分で耕す～ 話題提供者

伊藤 博隆(いとう ひろたか)



メッセージ

休みの日には、家の近所の里山へ行き、下草刈りなどもしています。

都会に住みながらも、そうしたちょっとした自然との関わり、恩恵を受けられないかと日々考えています。

横浜の里山で遊び、その森が開発をされていくのを見て環境について目覚める。
学生時代より環境活動に関わり、生協職員などを経て2000年より地球環境パートナーシッププラザ(GEIC)スタッフ。一般社団法人環境パートナーシップ会議理事。

7【創る】 ～自分で耕す～ 話題提供者

牧野 ふみよ(まきの ふみよ)



メッセージ

区民農園にいて、土に触れ、作物を育てる人たちの本当に楽しそうでシアワセそうな笑顔に触れ、日本人には土を耕す遺伝子が存在するのだなあと感じます。そんな遺伝子を、どんどん目覚めさせるための活動を、と模索&奮闘中です。

NPO 法人 Green Works 代表、NPO 法人大田・花とみどりのまちづくり事務局長。
地元大田区にて、都立高校で農業・園芸体験の市民講師として、
また、区民農園の管理者として、多くの人とともに小さな畑を耕しています

バズセッションの概要

テーマ:創る～自分で耕す～

グループ話題提供者: 須藤美智子氏、伊藤博隆氏
牧野ふみよ氏

記録係: 坂下誠氏、長澤沙織氏

テーマについての現状認識

- ・ 都会だと畑がない
- ・ 農的生活にどう関わっていくべきか、手段がわからない
- ・ 都会の中にも存在する限界集落(コミュニティ不足)
- ・ 生活者として消費するだけの日常、生産する側が見えてこない

理想とする姿、あるべき姿、実現すべき社会

← を実現する上での障害

- ・ 実際に体を動かし、体験する場がある。
- ・ 世代間のコミュニケーションが「農」を通じて存在する。
- ・ 地域社会に共存する皆で、同じ物語を描き、同じ思い出を「創る」こと。
- ・ 自然環境の中に、一部として存在する人間を認識できること。
- ・ 土地、手段、機会がない。

提言、結論、まとめ

- ・ 例えば、NPO、NGOの活動と行政がコラボレーションして提供していくスタイルを創る。

つまり

「全ては「創る」ことから始まる。まずは、ひとりひとりができる一歩を踏み出すところから。」

8 【変える】 ～政策を作る～ 話題提供者

郡 健次(こおり けんじ)



メッセージ

日本人は、食べ物を作り、獲る場から離れて暮らすようになって、たくさんのものを失いつつあるように感じています。農家さんに「がんばって」と言うだけでなく、みんなが支え、参加し、楽しめる食と農の明日を描いていければと考えています

1992年に農林水産省入省後、環境保全型農業担当、国会担当などを経て、現在大臣官房食料安全保障課勤務。京都産。いまだにまったく関西弁。そのくせ、納豆と横浜ベイスターズの「ねばり強い」ファン。

趣味は50m²しかない市民農園での土地利用型農業！？

バズセッションの概要

テーマ:変える～政策を作る～

グループ話題提供者: 郡健次氏

記録係: 志村恵実氏

テーマについての現状認識

- 生活者(消費者、作り手含む国民)を踏まえた政策になっていない。
(例)・ 地域に合わないものを作って農業多い
・ 作物つくることだけ視点
- 消費者も含めた国民の農への意識の低さ

理想とする姿、あるべき姿、実現すべき社会

- 持続可能性(生活者全体を踏まえた)
※ 生活者全体:作り手だけでも、消費者だけでもよらない

を実現する上での障害

- 生活者を踏まえた政策になっていない。
・ 政策がぶつぎり
(例:循環型と慣行農法とのつながり)
・ visionが足りてない

提言、結論、まとめ

- ☆ コンセンサスづくりーどういふ農であるべきか
(例:政策誘導)
 - ー 日本の農家(農業系企業含む)はこいふプライドをもつ
(責任と経済をどう育てるか)
 - ー 地域づくり(近郊農地を活かす、ブランド)
- ・ 一時的な補助金だけでなく、しくみづくり
※ しくみづくりの例:循環型への転換
:生産ー加工ー販売

つまり

「持続可能性を社会づくりのコンセンサスとした
政策展開を！」

8 【変える】 ～政策を作る～ 話題提供者

川島 豪紀(かわしま ごうき)



メッセージ

石破農相が仕掛けた農政改革論議の行方を追っています。

米の生産調整をどう見直しますか。

ご飯1杯10～20円の米価は高いですか。

消費者視点が求められる今だからこそ、生産者視点にこだわりたいと思っています。

日本農業新聞編集局農政経済部の農水省担当記者。

1995年入社。北海道支所勤務をへて2005年2月から国会担当、09年2月から現職。

群馬県出身。好物は焼きまんじゅう。車はスバル。好きな作家は横山秀夫。

バズセッションの概要

テーマ: 変える～政策を作る～

グループ話題提供者: 川島豪紀氏

記録係: 山田亨氏

テーマについての現状認識

- ・ 生産と消費が離れている
- ・ 経済が回る仕組みになっていない。
- ・ 消費者の言葉と行動が一致していない。そのための情報が提供されていない。

理想とする姿、あるべき姿、実現すべき社会

- ・ 相互理解、連携
- ・ 地域の創意工夫を活かした取組
- ・ 知恵が収益につながる仕組み

← を実現する上での障害

- ・ 興味のない方にどう伝えていくか
- ・ 現場での利害対立
- ・ 民の力では埋まらないもの

提言、結論、まとめ

市民: それぞれの立場から意見を述べる
生産: ビジネスを考える
地域: 小単位が地域の発展に向け行動

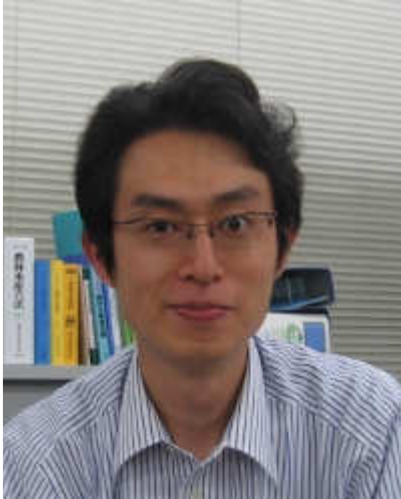
政策: 民の力では埋まらないところ
・ メッセージの発信
・ 表示など評価のための制度整備

つまり

「様々な関係者を結びつけて、
農業が持続できる仕組みをつくる」

8 【変える】 ～政策を作る～ 話題提供者

野津 喬(のづ たかし)



メッセージ

一部の関係者だけでは、【変える】～政策を作る～ことは非常に困難です。セッションでは、どうしたら多様な関係者の声を政策に反映できるのか、参加者のみなさんとざっくばらんに意見交換できればと考えています。

1998年に農林水産省入省。2007年4月より鳥獣被害対策室 課長補佐。岐阜県出身。最近、ベランダ菜園を始めました。本当に小さな菜園ですが、改めて、「育てる」ことの大変さ、面白さを感じています。

バズセッションの概要

テーマ: 変える～政策を作る～

グループ話題提供者: 野津喬氏

記録係: 谷村航氏

テーマについての現状認識

- ・ 政策をつくる(変える)ために自分たちの意見をどうやって伝えてよいか分からない。

理想とする姿、あるべき姿、実現すべき社会

- ・ 現場(農家・消費者等)の意見が政策をつくる人にちゃんと伝わる社会

← を実現する上での障害

- ・ 現場の意見を集約するシステムがない

提言、結論、まとめ

- ・ 政策を作る人が現場で働いてみる
- ・ メディア(TV、ネット)を使う

つまり

「行動する」

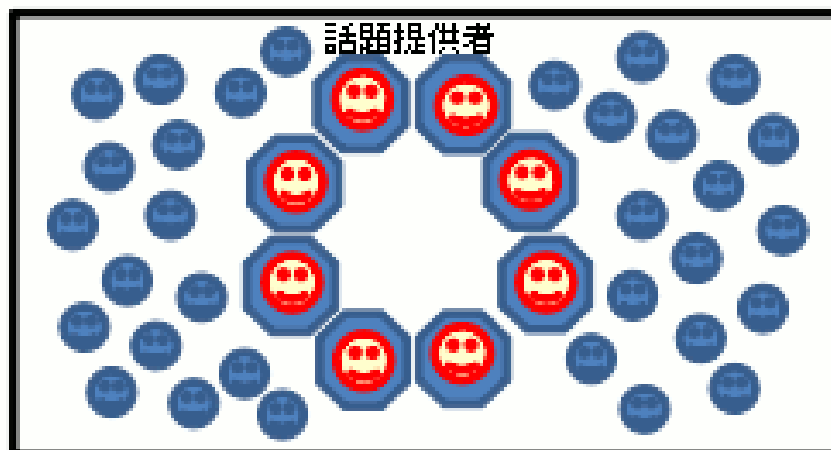
16:30～18:00 G8セッション 『いのちでつながるおいしい生活』

G8セッションはバズセッションでグループに分かれていたのを一つにまとめた、200人の大会議です。話題提供者を囲んで、バズセッションの結果を会場の皆に共有したりそれぞれの想いを発表したりしました。

10:00～丸一日セッションに参加して頂いた方も多く、皆様の農業、環境にかける熱意に驚きました。遊びも食事も議論も出来て、農林水産省に政策提言まで出来た一日でした。こういったワンパッケージのイベントをまた来年も行えればと思います。

話題提供者 :小黒一三、足立直樹、稲葉光國、藤崎健吉、
藤原誠太、中村陽子、石黒 功、
西郷正道(農林水産省環境バイオマス政策課長)、

司 会 :崎田裕子氏(持続可能な社会をつくる元気ネット理事長、環境ビジネスウィメン代表)
長野麻子氏(農林水産省)



G8セッション(イメージ)



1 【生き抜く】 ～命をいただく～ パスセッション助言者

小黒 一三 (おぐろ かずみ)



メッセージ

アフリカと関わって 30 年、ホテルを建てたケニアの国立公園の丘に立つ度に、結局一番愚かで野蛮なのが我々人類なのではないかと、思い知らされる。大パノラマに共存し、草を食むゾウの群れに最高の知性を感じるのは私だけなのだろうか。

1950年東京生まれ。1975年慶應義塾大学法学部卒業。同年、株式会社平凡出版社(現・株式会社マガジンハウス)入社、雑誌「ブルータス」「クロワッサン」「ガリバー」などの編集を担当。90年同社を退職し、(株)トド・プレス設立。99年、世界的に見ても類のない環境ライフスタイルマガジン「ソトコト」を発売。

8 【変える】 ～政策を作る～

西郷 正道(さいごう まさみち)



メッセージ

農山漁村には、いつまでも活用できる資源がたくさん眠っています。これらをうまくビジネスとして成り立つように利活用していくためには、皆の知恵を出し合って、新しいシステムを築かなくてはならないと思っております。よろしくお願いいたします。

生来の食いしん坊で、食べ物に関係の深い役所に入って 20 数年になります。これまで比較的長く環境関係の業務を担当してきました。現在も、温暖化対策、バイオマスの利活用、生物多様性保全対策などを担当しております。

G8セッション要約

会場からのコメントの紹介：会場からの「緑の保守」地方の一次産業の共通の、つなぐキーワードとして、今、布教している。というコメントがありました。

司会：これまでの報告を踏まえて、さらに拡大する方向で自由にご発言いただければと思います。いかがでしょうか。

稲葉：新潟の皆さんはまじめなので、一粒でもカメムシの被害粒があつてはダメだということで、徹底した防除をするんですね。これを、全国的に見ますと、除草剤に対する意識というのは、まったく農薬という意識がないんです。したがって、有機農業ということで参入しようとする非常に敷居が高いんです。それは本当によく分かる。60代、70代の方というのは、除草作業に一生明け暮れた世代です。それが、それ以降の世代になると、商業的な体系に染まっていますので、そういう中で施策をどう展開していくのか、景観に直接支払いというのは、農業にも環境にもプラスだと思います。

司会：除草剤ということで話がありましたが、先ほど「直す」ということでお話があった、藤原さんいかがでしょうか。

藤原：今、除草剤の話がありましたが、除草剤といっても、害があるもの、無いものの両方があるということ踏まえての意見と言うことでよいですね。畦畔で生きようという生き物もいますし、畦畔に出たカメムシが稲の方に移るといったものもあります。本

当はお米はカメムシはあまり好きではないんです。畦畔に草が無くなるからそっちに行くわけです。除草剤の問題は2つあるわけです。除草剤自体が身体に入って害があるもの、もう一つは、生態系そのものに害があるもの。これを考えていかなければ行けないと思います。それ以上のことはよく分かりません。会場のミツバチの脇に、自然農薬の使い方の本が並んでいます。カメムシが来なくなるという自然農薬もあるんです。ところが、農水省が認めていないんです。ですから、薬としてではなく、栄養剤として撒けば、どうかなと思っております。そのほかにもヨモギを5分ぐらい煮込んで撒けば、それだけでも、かなりの虫が来なくなるそうです。これしかないということで農薬を勧めるのは、農薬会社の考えなのかなとも思います。

司会：西郷さん、何かコメントはありますか。

西郷：おっしゃっている趣旨はよく分かります。一方で、今このような状況で化学農薬を使うのを全部やめますかという事になれば、それは無理です。いろんな防除等をする前提で品種も作られています。一方で、環境への負荷を低減していくということは、大原則の方向でございます。農水省もそういう方向ですし、農業者の方々もそういうことでいろいろ努力をされているという事だと思います。

テクニカルな話とすれば、自然農薬ということも良いんだけど、薬効をうたってはいけないとかという問題はあります。

司会：こうやってどんどん意見交換をいろんなところでしていったって、いろんな方々の認識を深めていくということが重要だと思います。ありがとうございます。

会場からのコメントで今届いているものは何かありますでしょうか。

長野：中村さんのグループのところで、大人を変えるのは難しいので、まず子供からだよねという話があったことについて2つコメントが来ています。まず、大人が作った環境問題を大人があきらめてはいけない。大人が変われば子供が変わる。また、大人が買い物をしたり、それをお友達にも勧めることで、一歩前向きに変えられることもある。あきらめないで一緒にがんばろうという意見がありました。

司会：ありがとうございます。子供の食育というのもあるんですが、大人がライフスタイルを変えて買い物をするとか、野菜を買うときに考えて買うとか、今の農業の問題と消費者の意識というのが関わってくるということでした。これまでも様々な意見をいただけてきていますが、いかがでしょうか。

中村：大人をあきらめたわけではないんですが、幼児教育をされている相澤さんが、子供が変われば大人が変わるということで、子供が入口だと大人も変わるということをおっしゃっていました。大人がやらなければならないのは当然なんですけど、大人は既に安いものを買うという意識ばかりですから、子供がそこに入ることで、変えていけるのではないのでしょうか？

司会：中村さんのグループで発言をされた方どうぞ。

相澤：子供の好き嫌いですとか、なかなか食べてもらえないということで、本来はそうい

う問題は家庭の問題ではあるんですが、お手上げということで来る方が多いのです。それで、体験で田んぼに行くと、家では食べないのに、食べるようになるということの一つのきっかけとして伝えたいなと思っています。

司会：先ほどからすごく気になるのは、消費者はやっぱり安いものを買うということがずっと出てくるわけですが、おいしいもの、健康によいものを買っていくということを消費者がもっと考えていくということが重要なんだと思うのですが、何か消費者のそういう意識、消費行動を変えていくためのコミュニケーションについて、ご意見をお持ちの方がいらっしゃれば、是非、発言をお願いします。

会場：最近では、消費者が農家と直接つながるようなことが、ネットを使うことなどによりできるようになってきているので、農薬を使わないとかといった生産の情報をもっと消費者が勉強することもできます。

司会：外食では生産者と消費者が直接つながるようなところが増えてきていますよね。（会場：そうです）そういうところが増えてくれば、消費者の意識も変わっていくのではないかというお話でした。ありがとうございます。

会場：食べるということ、食というのは文化だと思うんです。ですから、ただ安ければよい、早ければよいということではなく、食を通して会話を楽しむ、ゆっくりみんなで楽しむという、そういう文化を創っていくことをやっていく必要があると思います。私の場合には、家に人を呼ぶんですが、そのときに、ストーリーのあるものを一品持ってきてくれとお願いをするんです。そうすると、おばあちゃん家から送ってきたタケノコですとか、買って来たんだけどもこういう生産者の方が作っているんですよというストーリーも一緒に持ってきてもらえると、食卓自体ただパーティをやるよりも話題になりますし、他の楽しい文化も創ることができると思うんです。そういうことは私たち一人一人できると思うので、食べ物だけでなく、その周りの文化というものを創っていくということも必要だと思います。

司会：ありがとうございます。食は文化だという話でした。ストーリーがある一品というお話でしたので、是非、木内さんにも一言お願いしたいと思うのですが。

木内：おそれいます。環境とか持続性とかCSRとか語れど話せど通じませんよね。どうすればよいかというとストーリーです。ストーリーを付けて話せば通じるんです。私の母親、明治35年生まれの母親の口癖は、誰が作ったか分からないものは口にしたくないよ。ということなんです。これはいろんなことを含んだ言葉だと思います。以上です。

司会：ありがとうございます。顔の見える農業といった言葉も定着している中で、私たちもしっかり頂いていかなければならないんだなと思っておりませんが、どんどん手が上がってまいりましたので、よろしくをお願いします。

鬼沢：先ほどの発表の中でもありましたし、今の発言の中にもありましたが、どういう情報が伝わるのかということが大切なんだと思うんです。当然、そこにストーリーのあ

る情報が伝われば、皆さん感動しそこに動いていきます。そこで、どういうターゲットに何を伝えるかということがとても大切だと思いますので、今日、遅れてはいらっしゃったんですが、情報の発信の元である、ソトコトの編集長さんに、是非その辺、どういうストーリーを持って、誰を対象に、どうやって、どういう情報を発信していったら、私たちが抱えている問題を広く語り伝えていけるかということをご意見をいただけたらと思うのですが。

小黑：先ほど、彼女の方からストーリーのある一品を持ってきてという、すごくいい話がありました。環境を食を通して伝えるというイタリアのスローフードを教えて頂き、本当に驚きました。彼らは世界中の10万人以上の会員を集めるところまでいった訳ですが、それは何なのかといえば、イタリア人のくせに、自分の食文化を大事にしようとしたくせに、イタリア語じゃなくて、なぜか英語なんですね。スローフード。一番大事なことは、効いたら忘れない言葉にしてあげる。先ほど、彼が「緑の保守」って言いましたが、あれは分かりにくいですよ。オバマのグリーン・ニューディールは分かりやすかった。忘れないキーワードで伝えること、決して新しい言葉でないんですが、僕自身が、LOHASの後に気になっている言葉は、「懐かしい未来」というのが気になっている。30年ぐらいアフリカに関わっているんですが、動物なんてそんなに好きでもないのに、自分自身がなんでアフリカに惹かれるのかなと思うと、それは彼らの暮らしやしきたりだったりだと思うんです。

シンプルな食文化を伝えるということでも、私が好きな「懐かしい未来」だと思うんですが、「懐かしい未来」って一回聞くと、皆さん忘れないし、なんか分かったような気になりますよね。実際には表現できていないんだけど、そういうキーワードに落とし込めば伝わるんだと思います。

司会：ありがとうございます。

長野：農業者と消費者をつなぐという話がありましたが、有名な銀座泥武士の境さんが来ていますので、是非、発言をお願いします。

境：日本に最高のものがあれば、日本のものを使う。ただ、どこにどんなものがあるのかなかなか分からない。もっと分かりやすい流通を作ってもらえれば、農業と消費者がもっとつながる。消費者は良いものを出せば、きちんと良いと分かる。

司会：仕事柄、本来農業ということで、情報発信をされている石黒さんお願いします。

石黒：安定的に東京に届けるという妄想にとりつかれている。それはそれで大切なことではあるが、消費者がそれを本当に望んでいるのかは疑問。農業と消費者が離れて行けば行くほど歪みが出てくる。60歳以上の農業者は作ることと食べることが経験として一体としてとらえられている。ドイツではどんな街でも市民農園が定着しており、食料自給率を向上させるぐらいの規模になっており、作る側と食べる側の距離を縮めることに役に立っているのではないかと。

司会：確かな農産物を届ける仕組みなどを郡山さんからご紹介いただけますでしょうか。

郡山：もともとは、農産物を農家の方々と一緒に作ってきたが、なかなか働きに出ている人は難しいというので、共同購入に変わっていったが、それも共稼ぎだと辛いということで、今の宅配形式になっている。私どもがお客さんに言っているのは、畑は急には止まれないということ。定期的に購入していただく必要がある。最近では、農業体験ツアーを呼びかけ、大変多くの方々に参加していただいている。

司会：足立さんの手が挙がっていますので、お願いします。

足立：顔が見える関係というのは、お互いどのような方か分かるということ、農産物でいえば、どのような方がどのように作っているかが分かるということ。決して、生産者の顔写真が農産物に張っていることを指すわけではない。農産物も植物であり、本来多様なもの。これを味がよい、見てくれが良いということで、単一化してきたところに問題がある。消費者に実態を見てもらい、知ってもらうことで、当たり前のことを確認していく必要がある。

長野：会場から発言がありますので、お願いします。

原：これまで、会場で発言されてきたことというのは、皆さんが望んで実現してきたことということをしちんと押さえないとおかしな事になる。生産者は、多品種少量生産を続けて、目の届くところで流通していた。それが、消費者がスーパーでの買い物を思考するようになり、全国的な大規模流通が求められ、どんどん産地が大型化していた。産地は流通の要求に応えることでやってきた。バラ流通でやると流通業者は儲からない。ヨーロッパでは野菜はキロで買う。日本では個で買う。ヨーロッパでは生食もするけどもジャムを作ったり、煮込んだりする。日本では生食しかない。食べ物に対しての文化が違う。全農や農協を擁護するために発言する訳ではないが、今の流通がなぜこのようになったのかということをしちんと踏まえて議論しないと、建設的な議論にならない。

司会：時間が無くなってきたので、最後、報告者の方々から一人一言ずつ発言していただいて閉めたいと思います。お願いします。

藤原：情報が伝わらないと消費者も良く分からない。ラ・フランスも消費者に食べ方の情報が上手く伝わっていなかったのも、はやらなかった。農薬を使った農産物と、有機栽培の農産物を消費者の目の前でジュースにして、最後、使った農薬と同じ量の農薬を有機栽培の農産物のジュースに加えたらどうでしょうか。是非、このような実験をやってみて欲しいと思います。

中村：メダカもミツバチもきちんと話してくれるので、生き物に聞くということ、行動の基準にして行くべきだと思う。生き物視点で考えることにして、それ以外のことは考えないようにしたらよいと思う。手間が増えるということは良いことだという風に考え方を考えることも必要ではないか。

石黒：農業の現場では、まだまだすばらしい技術を持った方々がお見えになる。ただ、作ることにプロであっても、品質などを伝えることに関してはまだまだ。もっともっと

アピールしていくためにも、皆さんの協力を得てやっていきたいと思います。

藤崎：自分で作って売るということを考えたときに、どのような方向に向かっているのかということ、立ち位置をはっきりして考えていく必要があるのではないかと考えました。

稲葉：研究所という名前の組織なので、よく研究者に間違えられるのですが、8haの農地を耕す農業者です。自給率向上のためには有機でなければならないと考えています。慣行栽培では国際競争力がないと思います。日本では、天候の関係で有機農業は難しいといわれていますが、そうだからこそ、生き物の力を借りてやる有機稲作を進めていきたいと思います。

小黑：今日は朝からお疲れ様です。このような大変多くの方々が見えられているのは、国には任せておけないということだと思います。来年もこの会があるのなら、マサイの養蜂家を連れてきたいと思います。

西郷：農業はたくさんの問題を抱えています。じゃあそれをどうするのかということで、農政の方向性は、食料・農業・農村基本法に基づく食料・農業・農村基本計画を5年に一度作ることになっていて、その年が来年です。先ほど、意見を言う場がないのかという声がありましたが、是非、様々な場をとらえて意見交換をしていきたいと思えます。

司会：一つだけ質問をさせていただきたいと思います。有機農業をする方々を支援するための施策というのは考えていただくわけにはいかないのでしょうか。

西郷：有機農業支援法については昨年、議員立法で作られた法律ですが、全体的な流れとしては、そのような農業を支援する方向性で動いていると思います。ただ、個人の財産になるようなものを直接支援するようなことは財政法の関係で、なかなか難しい側面もあります。そのようなことも踏まえまして、どのような方法があるのか、考えていく必要があると考えております。

司会：これで全部のプログラムが終わりましたが、長野さんいかがでしょうか。

長野：生産者と消費者をどう繋いでいくとか、消費者の側も高いものには理由があるし、安いものにはわけがあるということを考えながら買い物をすべきであるとか、声の大きな人の意見ばかりを聞いて施策を決めていないとか、消費者の意見を聞ける機会が少ないという農家方々の意見も含めて、いろいろと考えさせていただきました。今日は、農水省の職員も20名以上来ていますので、しかと聞きましたので、今後の仕事にいかして行きたいと思います。

司会：今日、司会をさせていただくことでいろいろ考えさせていただく良い機会になりました。みなさんも是非、今日の機会を活かして行って欲しいと思います。

—以 上—